巻 頭 言

長野県の今後の医療を見据えて

天　野　直　二

うつ病対策が国あげての重要な取り組みとなっている。この10数年連続して自殺者数が３万人を下らないという現象が続いているからである。平成25年度から本邦における医療計画体制として，４疾病（がん，脳卒中，急性心筋梗塞，糖尿病），５事業（救急医療，災害時における医療，へき地の医療，周産期医療，小児救急医療を含む小児医療）に“精神”が加わって５疾病５事業となる。この“精神”にはうつ病だけでなく，この高齢化時代を反映して200万人とも言われている認知症に対する医療体制も加わる予定である。医療の焦点が高齢化は言うまでもなく“こころ”を強く念頭に置いて一人ひとりに対するきめ細かい医療の仕組みが要求される時代になろうとしている。

昨今の医療を取り巻く状況は何かと厳しい。大学病院は独立採算的な運営を強いられ，インシデントに対する世間の批判的な反応，地域医療における医師の絶対的な不足と医師の過重な労働等々，多くの課題を抱えている。しかしながら，信大病院の使命と責務は，診療・教育・研究において叡智を培い，日常の活動はもとより世界に発信できるレベルの高い先進医療や医学研究を遂行することであり，この成就に向かって前進することを願ってやまない。

現在，信大病院が取り組んでいる課題を中心にして今後を見据えて考えてみたい。

まず最初にあげる課題であるが，特定機能病院として高度の医療を提供するには大学病院を中心とした病々連携や病診連携の充実が逼迫している。県内の基幹病院では電子カルテの導入が進んでおり，その電子カルテを中心にした県内医療機関のネットワーク化が始まっている。今後の地域医療のあり方を左右する大きな課題である。このネットワーク化により医療情報の交換という連携は大きく様変わりし，医療連携の効率化を図るだけでなく，県内の医療レベルの底上げにも繋がっている。一方，電子カルテの公開は患者のプライバシーを守れないという見方もあるが，患者の同意に基づいて関係する人のみが関与するという限定されたシステムであり，個人情報に対する安易な扱いがないように倫理的に慎重かつ丁寧に進められている。NPO法人信州メディカルネットの発足を受けて，地域医療の連携システムが長野県の医療水準の向上に大きく寄与することを期待している。

信大病院は長野県のがん診療拠点病院の中心的存在であるが，残念ながらその体制や専任医師組織や機器整備が十分であるとは言えない。長野県全体をリードしていく責務がある以上，がん診療に特化した診断・治療・予後の部門の充実を迫られている。安全な医療環境の保証と高度医療の提供のためにも病院基盤設備のマスタープランを作成して計画的な整備を早急に図っていく必要がある。宮川教授をリーダーとした，がん診療の整備に向けたプロジェクトチー

ムが立ち上がり，診断・治療だけではなく医療情報や緩和を加えた4部門で積極的な検討が開始されている。このチームの活動を中心にして，今後中長期的な重点計画が作成され，長野県独自のがんセンター構想が着実に実行されて，県のがん診療に大きく貢献できることを願っている。

信大病院にとって人材こそ宝である。命の尊さと心身の痛みがわかる人間性豊かな医療人を育成し，魅力ある教育プログラムで一貫した教育の充実が必須である。初期研修医は年々減少するきらいがあり，若手医師の獲得は大学病院の存続に関わる重要な課題となっている。初期研修医の獲得のためにも，各診療部門が足並みを揃えた後期研修システムの確立だけではなく，医学教育センターと密な連携の下に一貫した卒前・卒後の生涯教育が切迫している。“生涯教育センター”なるものを視野に置いて，卒後臨床研修センター等の教育・研修に関わるいくつかの組織を機能的に合体することが必要と痛感している。

本院における高度救命救急センターを中心とした救急医療の進展は素晴らしく，長野県で2機目となるドクターヘリの運用が開始された。3月11日の東日本大震災，そして翌日の栄村地震という体験で信大病院の震災・防災における役割を認識し，想定外という言葉があまり意味を持たなくなった現在，激しい災害に対する電源確保，医療品や食物の備蓄，緊急時の医療体制等々鋭意検討している。また，電子カルテ一つ考えても遠く離れた場所での保存も考えなくてはいけない時代でもある。救急・災害医療のさらなる充実を期待する。

長野県の地域医療の活性化の根幹は，人事交流を盛んに進めることであり，地域の医療機関と連携した研修・研究が必要である。その一環として大学病院としての特徴を最大限に生かした臨床研究を推進する責務があり，がん医療，再生医療，生活習慣病の予防等の課題に対して，各講座や近未来医療推進センターにおいて研究心に富んだ実践と発展，基礎医学研究との連携等々，今まで以上の取り組みと研鑽が必要である。信州大学医学部では10年前から有名国際誌に掲載される論文が徐々に減り，東大，京大に追いつけ・追い越せという精神が一般的な地方大学の域におさまりつつある。国からの海外留学支援の費用が激減する等の劣悪な研究環境を克服し，オールジャパン，そして国際化をめざすことは信大病院全体の課題である。

信大病院にとって先端的医療の推進が大きな目的ではあるが，日々の診療も大切な任務であり，この高齢化時代に対応できるように患者にとって優しい医療が望まれている。働く一人ひとりの向上心を尊重し，より良い医療環境の保全とその質の向上を図り，病院収支のバランスを鑑みながら，この高齢化時代に即応した健全な病院経営を進めることが必須である。教職員自らの有意義な発想や各部門の中期重点計画を重用し，本院にとって大きな特色となるような教育・研究・診療のプロジェクトを多く活用し，信大病院の機能強化を図ることも大いに望まれている。

以上のことを踏まえ，信大病院が長野県における医療の最後の砦として，様々な急性期疾患や難治性疾患に対して高度な診療を安全かつ確実に行い，地域の方々から信頼される質の高い医療の提供し続けることを念じている。

（平成23年11月）

（信州大学医学部附属病院長）